

推薦のことば (五十音順)

飯沢耕太郎 (写真評論家)

また、「焼け跡・闇市」があらちに残る敗戦直後の日本に、新たなフォトジャーナリズムの芽生えがあった。戦前にドイツから「報道写真」の理念をもたらした「木工工房」を主宰して奮闘した名取洋之助が編集長を務め、小形カメラによるトップショットで新風を吹き込んだ木村伊兵衛が写真撮影を担当する。三木淳や稲村隆正、長野重一のような若手写真家たちも名取の指導のもとにめきめきと腕を上げていった。活字を横組にする斬新なレイアウトも、読者に鮮やかな驚きを与えたはずだ。

だが「日本のライエ」を目指す「週刊サンニクス」は、名取らの意気込みにもかかわらず、一年半という短い期間しか続かなかった。理想の雑誌を目指す彼らのもくろみと、時代状況とのギャップが、ここでもやや大き過ぎたということだろう。それでも、この「幻のクラフ雑誌」は、編集者や写真家たちの積年の夢の結晶といえる。戦時中に自由な活動が抑圧されたことへのフラストレーションが、一気に花開いたのだ。その全貌が、いま復刻版としてようやく姿をあらわそうとしている。ぜひ手にとって、じっくりと眺めてみたい。混迷が続くフォト・ジャーナリズムの未来を照らし出す、糸口が見えてくるのではないだろうか。

佐藤卓己 (京都大学大学院教育学研究科教授)

戦後史、とりわけ占領期の歴史研究は、近年ますます勢いで進んでいる。この「焼け跡のクラフ雑誌」(一九四七―一九四九年)が、いま注目されるのは当然だ。私もこれまで何度か古書店で「週刊サンニクス」を見かけたことがある。だが、なかなか個人では手が出ない価格が付けられていた。今回の復刻は、メディア史研究者にとって大なる朗報だ。いうまでもなく、このクラフ雑誌が刊行されていた占領期は、厳密にいえば日本が軍事占領下にあった「戦中」であり、このメディアの性格も戦前と戦後の連続性において理解すべきだろう。編集の中心にいた名取洋之助は、一九三〇年代の「非常時」日本にルポルタージュ、フォト報道写真という言葉をもち込んだ人物である。その後、対外宣伝誌「Y.P.O.N.」(一九三四年創刊)や「国策クラフ雑誌」(一九三八年創刊)など戦時プロパガンダでもその手腕を発揮している。その名取が「週刊サンニクス」を最終後に編集するのは戦後民主主義を記録する「岩波写真文庫」なのだ。今日では「N.I.P.O.N.」は復刻され、「写真週報」はアジア歴史センターHPで全文が閲覧でき、「岩波写真文庫」も多くが復刻されている。つまり、「週刊サンニクス」はこれまで報道写真史のミッシングリンクだったわけである。



日清戦争に始まる日本の画報の流れの中で、写真を主体としたクラフ雑誌は一九二三年創刊の「アサヒクラフ」が嚆矢である。世界的なクラフ雑誌である米国の「LIFE」の創刊が一九三六年であるのを考えても、日本のクラフ雑誌の歴史は長く豊穡であるが、その中で一九四七年十一月創刊の「週刊サンニクス」は占領期を代表するクラフ雑誌である。戦時宣伝に携った名取洋之助が戦後手がけた雑誌だが、一九四九年三月に廃刊「毎日グラフ」(一九四八年七月創刊)などの新聞系クラフ雑誌に比べ短命だった。それだけに占領期において凝縮されている。第四号表紙の闊歩する女性の足元から銀座PXの建物を捉えた大胆な写真は、その象徴であろう。カラー印刷の表紙をいち早く用い、海外事情や経済・社会問題を写真と図で分かりやすく説く一方、井伏鱒二の小説もあれば、芸能やファッションに至るまで内容は幅広い。同じく毎日新聞社の支援を受けて先に創刊された日刊「サン」写真新聞との関係や、後の岩波写真文庫や岩波映画製作所の関係者が多く寄稿している点でも興味深く、戦後の写真ジャーナリズムを語る上では逸することのできない貴重な雑誌の復刻は、久しく待たれていたものである。

土屋礼子 (早稲田大学政治経済学術院教授)

本書の特色

●当時の出版事情により紙質が悪く、現存が稀なため本誌は「幻のクラフ雑誌」とも称されていたが、このたび各方面の協力により全冊を揃えて元サイズのまま完全復刻。表紙などカラー部分は原色にて完全再現した。

●戦後占領期日本のリアルな世相・風俗が詳細かつ克明に写し撮られた、他に類を見ない社会的・歴史的一次史料。

●その後の写真界・ジャーナリズム界を担うこととなる俊英写真家たちの原点を発掘。

●当時最高水準の執筆者を集めた幅広い内容は、戦後花咲いた雑誌文化の実情を反映し、出版史・グラフィック史の貴重な資料である。

●今回の復刻にあたって新編集の別冊を付し、『週刊サンニクス』刊行の背景についての詳細な解説、全巻総目次、付帯資料等を収録して利用者の便を図った。

本書をお薦めしたい方々

- 近現代史・戦後史・社会史・ジャーナリズム史などの研究者／文学部・社会学部
- 写真史・グラフィックデザインなどの研究者／芸術学部・写真・デザイン系専門学校
- 大学図書館・都道府県市立図書館・博物館／戦後の風俗・社会に興味のある方

復刻版 週刊サンニクス

(全41冊・全4巻(合本十別冊))

「協力」一般財団法人日本カメラ財団

B4判・上製クロス装・セット函入り

揃定価…本体88000円十税(分売不可)

ISBN978-4-336-06212-3



国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15 Tel. 03-5970-7421 Fax. 03-5970-7427 URL: http://www.kokusho.co.jp E-mail: info@kokusho.co.jp

帖合・書店印

申込書

国書刊行会「復刻版 週刊サンニクス」を_____セット申し込みます。

お名前 _____

ご住所 _____

お電話 _____

*必要事項をご記入のうえ、書店へお渡しく下さい。

戦後の社会・風俗をリアルに写し出した
幻のクラフ雑誌、ついに完全復刻!



復刻版

週刊サンニクス

国書刊行会

全4巻+別冊1 (全41号)

「監修」白山真理 (一般財団法人日本カメラ財団調査研究部長)



監修にあたって

白山眞理

占領期に創刊された総合グラフィ誌の嚆矢『週刊サンニクス』は、一九四七年十一月十二日号から四九年三月五日号まで刊行された。戦中に対外宣伝グラフィ誌を製作していた名取洋之助が編集長格となり、戦前・戦中につき合いのあった写真の木村伊兵衛、藤本四八、小柳次一、牧田仁らを誘い、木村と縁のある菌部澄、多川精一、村田道紀が加わり、若いスタッフとして、写真の三木淳、稲村隆正ら、美術担当の岡部冬彦、根本進らが集められた。戦中グラフィ誌に携わった者たちとそれを慕う若者たちの梁山泊となった編集部で、若者たちはカメラマンとしての力を養い、漫画家となり、編集者として採用された長野重一も後に写真で頭角を現した。同誌が「サンニクス写真学校」とも名取洋之助とも言われる由縁である。B4判左開き横組で見聞きレイアウトを優先させて「日本の「LIFE」を目指した同誌の内容は、リベラルで啓蒙的であった。それだけに、戦後の享楽的世相の中で返本の山を築き、発行所は写真通信社のサンニクスフォトスからサン出版社に移されて、日本の読者に見慣れた右開き縦組みに改変され、週刊といながら月に一度しか発行されないこともあった。井伏鱒二の小説や小泉信三のエッセイなども掲載されてしばらく旬刊を続けた後、突然刊行が途絶している。この後、カメラマンやスタッフの多くは名取が編集・企画に携わった『岩波写真文庫』（五〇年六月に刊行開始）に活躍の場を移し、『週刊サンニクス』に掲載された写真が『岩波写真文庫』で使われることもあった。

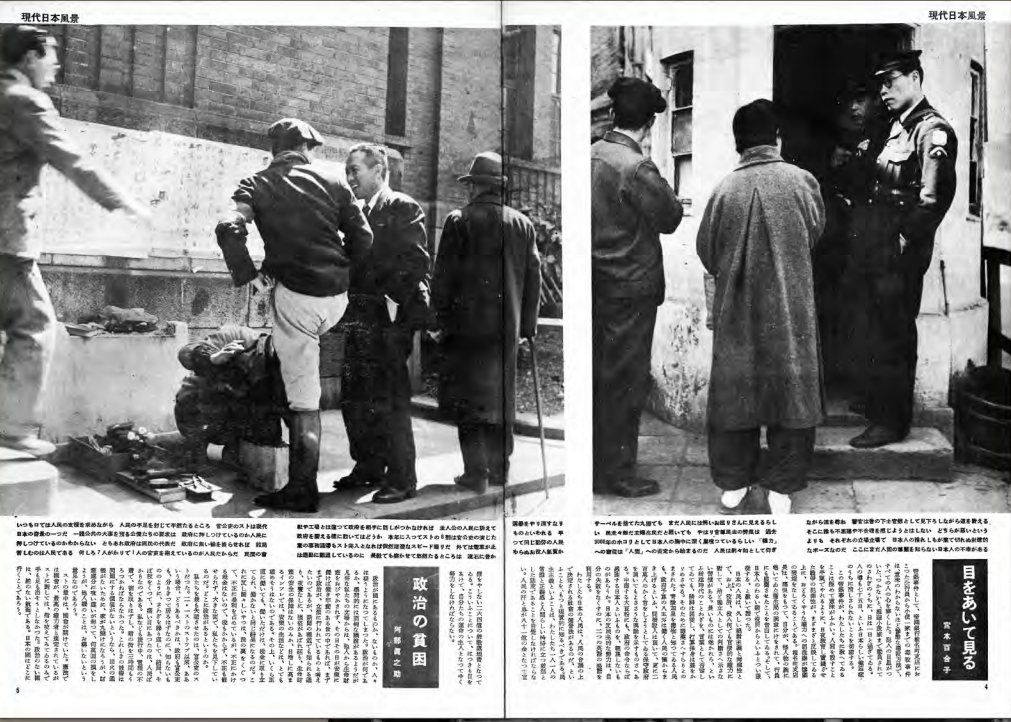
わずか一年四月しか刊行されなかったこのグラフィ誌については、後に一時代を築いた写真家が多数参加していることから、写真史の立場で語られることが多かった。一方、本誌はサンニクスフォトスの事業であり、社長である山端祥玉を始め、前述の写真や美術スタッフに戦中の対外宣伝、つまり、プロパガンダに邁進した者が集合している。この時期に発行された雑誌のご多分に漏れず、劣悪な紙質のために現存は少なく、従って研究が進んでいるとは言えないのが現状だが、メディア史研究、占領期研究の見地からの解析が待たれている。

婦人の権利、食糧問題、被災孤児、物価引き下げ運動、東宝争議、昭電疑獄など占領政策や社会問題について、あるいは、退廃的現実やヌード劇場などカストリ雑誌で伝えられような世相について、『週刊サンニクス』はどのように伝えたのか、伝えなかったのか。当時、国内のグラフィ誌には『アサヒグラフ』『世界画報』などがあつたが、新聞社系やその他のグラフィ誌と論調に差異はあるのか。そして、執筆陣に占領軍プロパガンダの影はあるのか、興味は尽きない。

創刊から七十年を経た『週刊サンニクス』の復刻版刊行によって、様々な研究の新しい地平が開かれることを期待して止まない。



懐かしの日本。 「報道」「写真」「戦後」 を振り返る基礎資料!



本文見本、40%縮小（第1巻 第1号より）

本文見本、25%縮小（第2巻 第14号より）

本文見本、25%縮小（第4巻 第38号より）

●目次の一部（抜粋）

- 第1号（1947年11月12日発行）
 - 利根川決壊口 第三期工事おぼる 写真・木村伊兵衛
 - 女書雑感（文・中谷吉郎）
 - 水の横顔をうつす 写真・木村伊兵衛
 - 古八住宅 写真・木村伊兵衛
 - ふる人づつ 1分間に2・6人（写真・三木淳、イラスト・根本進）
 - 外国報道／外の見た日本、ウリアム・モテロ、米口ンビ放送局極東部長
 - 外国報道／フランスの戦地
 - 極北奇譚／「奇人執筆者紹介（冬青庵主人「小林勇」）写真・稲村隆正
 - 娯楽・運動／「脱出、ワナー・ブラザーズ1944年度作品
- 第2号（1947年11月19日発行）
 - 牛蛙海を渡る（写真・木村伊兵衛）
 - 東畑精一教授は供米について語る（写真・菌部澄
 - バレー、太田黒元雄氏談（写真・三木淳）
 - 生きる為の貿易から生活向上の貿易へ（写真・菌部澄、イラスト・村田道紀）
 - 輸出船に上出した英国、ドナエムマクナケ、ロイ通信社特派員、写真・稲村隆正
 - 上海／生活費1日100万ドル（イラスト・根本進）
 - 極北奇譚／中垣虎児郎（イラスト・村尾純子）
 - どろづつえん（写真・藤本四八、イラスト・根本進）
- 第3号（1947年11月26日発行）
 - 日本銀行（写真・牧田仁）
 - 踊る宝塚（写真・木村伊兵衛）
 - 跳ぶ子犬（写真・稲村隆正）
 - 不在地主はなくなった、農地改革を現地を見る 栃木県那須郡回田村（写真・藤本四八）
 - 日本の移民（ヘルム・ティルマン、ロンドン、テリー・ラルド極東総局長
 - 家庭の楽し工夫（写真・三木淳）
 - 世界の舞台／近代ドイツ絵画展ほか（AFBサン）
 - ポワエとパルマン MGG提供（サン、ACME）

●「週刊サンニクス」に執筆した人々——（順不同）

- 井伏鱒二／中谷吉郎／安藤鶴夫／石川達三／羽仁五郎／
- 清水幾太郎／宮本百合子／中島健蔵／武見太郎／
- 久保田万太郎／双葉十三郎／海野十三／岡本太郎／
- 大田黒元雄／野口久光／小泉信三 など

●「週刊サンニクス」を作った人々——

- ・名取洋之助（1910-1962） 1933年に日本工房を設立、海外向けの文化宣伝グラフィ誌『NIPPON』を創刊。『週刊サンニクス』の後、岩波写真文庫の企画・編集の中心となる。
- ・木村伊兵衛（1901-1974） 1933年、名取洋之助らと日本工房を立ち上げ、翌年中央工房を設立。41年に東方社写真部主任となり『FRONT』に携わる。47年頃にサン・ニクス・フォトスに入り『週刊サンニクス』に携わる。49年にフリーランスとなる。50年～57年、日本写真家協会会長。
- ・三木淳（1919-1992） 貿易会社入社後の1947年にサン・ニクス・フォトスへ入社して東京裁判取材などに携わる。48年にINP通信社に移り、49年に米タイム・ライフに入社。56年にフリーランスとなる。80-88年、日本写真家協会会長。
- ・稲村隆正（1923-1989） 1947年に三木淳の誘いでサン・ニクス・フォトスへ入社し『週刊サンニクス』に携わる。49年に米通信社のイーストウエストに移り、52年にフリーランスとなる。
- ・菌部澄（1921-1996） 1943年、東方社に入社して暗室業務に携わる。47年にサン・ニクス・フォトスに入社し、暗室業務と『週刊サンニクス』に携わる。50年に岩波映画製作所に移り、57年にフリーランスとなる。平成7年に芸術選奨受賞。
- ・岡部冬彦（1922-2005） 『週刊サンニクス』参加後は漫画家として活躍。『週刊朝日』に連載した「アッチャン」等で文藝春秋漫画賞受賞。
- ・根本進（1916-2002） 『週刊サンニクス』参加後は漫画家として活躍、『朝日新聞』連載の「クリちゃん」が大人気となる。長年の漫画界への貢献で日本漫画家協会特別賞受賞。